『走湯山縁起』について
―その価値の再検討―

鴨志田　美香

1　はじめに

『走湯山縁起』は走湯権現の縁起書である。「走湯山」とは、現在の静岡県熱海市に鎮座する伊豆山神社のことである。伊豆山神社は、中世には走湯権現、伊豆山権現とも称された。『走湯山縁起』によれば、走湯権現は善光寺如来と共に三国から渡来した異域の神人（本地観音）で、温泉を湧出して衆生を済度することを本誓としているという。「走湯山」の呼称は、広義において権現が垂迹した日金山、岩戸山、伊豆山などの霊山を含む霊場そのものをも示している。

走湯山には、役行者が湧き出づる湯の中に千手観音を感得し、「無垢霊湯　大悲心水　沐浴罪滅　六根清浄」という偈を授かったという伝説があり、また『梁塵秘抄』に「四方の霊験所」と歌われるほど、早くから優れた修験霊場として名を馳せ、顕密両派がその勢力を競っていた。鎌倉時代には、鎌倉幕府の鶴岡八幡宮を中核とした宗教政策の下において、走湯権現と箱根権現はともに準宗社として遇され、走湯権現と箱根権現の二所を詣でるいわゆる二所詣が流行した。二所を廻ることによって生じる宗教空間は、やがて伊豆山と箱根の神々が、かつて兄弟姉妹であり、天竺から日本へ渡ってきた神であったという、本地物語（『神道集』「二所権現事」、『箱根権現縁起絵巻』など）の成立の基盤となった。伊豆、箱根には士庶の参詣のみならず、多くの修験者、顕密僧、聖たちが往来した。例えば、走湯山東谷に生まれた浄蓮坊源延は、比叡山で唱導の大家・安居院澄憲に学び、走湯山における叡山浄土教の祖師的存在となった。[1]『善光寺如来縁起』には「浄蓮上人源延如来奉拝見事」という話が記されている。安居院澄憲の子聖覚も、伊豆、箱根に来山しており、[2]『神道集』「二所権現事」等に記される伊豆・箱根の本地物語の形成や展開には、聖覚率いる安居院一派が大きく関与していると指摘されている。また、走湯権現の別当寺である密厳院を中心とした真言勢力の発展もめざましく、一二〇〇年の終わりから一三〇〇年の初めにかけて、妙静上人宥祥が伊豆流という教学を打ち立てた。櫛田良洪氏[3]は伊豆流、伊豆教学の東密弘布の力が関東教学に多大な影響を及ぼしたことを論証されている。走湯山は鶴岡八幡宮、箱根権現との連携を保ちながら、東西の文化の融合する地、また宗教文化の発進基地としても、大きな役割を担ったのである。

このような時代、そして文化の交流の場、伝道の場において、『走湯山縁起』は編纂された。『走湯山縁起』には、本地垂迹思想に基づく走湯山信仰の歴史や儀軌が、縁起作成の技術、唱導、教化の優れた技法を駆使して描き出されており、そこには当時の走湯山の僧侶たちの学問体系が少なからず反映されていると推測される。

さて、『走湯山縁起』（全五巻、漢文体）は、「巻六」として『走湯山秘決』（一巻、和漢混淆文）を付している。群書類従には、このうちの『走湯山縁起』のみが収録され、『走湯山秘決』は「群書解題」に紹介があるのみである。このために、中世の走湯権現に関する基本資料として、専ら『走湯山縁起』のみが論じられてきた。『走湯山縁起』は「物語的縁起」と「歴史的縁起」を豊かに内包しており、歴史学の側からは史実に乖離した荒唐無稽なものと考えられ、その存在価値が十分認められなかったようである。近年、中世の社寺縁起の価値が見直される中、『走湯山縁起』が『走湯山秘決』を含めて論じられるようになった。その先駆

となったのは、澤井英樹氏「異域の神人と神龍―走湯山縁起の世界(一)」[4]、同氏「行者・巫女・氏人―走湯山縁起の世界(二)」[5]である。澤井氏は丁寧な読解と考察から、走湯山のダイナミックな宗教宇宙とその神の造形等の解明を試みられている。

しかし、『走湯山縁起』は、その成立や『走湯山秘決』を含めた解釈等、基本的な問題からも見直されるべき問題は数多く残っている。例えば『走湯山縁起』の最古の書写本（南北朝時代）と目される一本が、前田尊経閣文庫に現存している。それは金沢称名寺の僧全海の自筆の書写本であり、もともと金沢文庫に伝来したものであった。全海の盛んな書写活動[6]の中に位置づけられる『走湯山縁起』の存在は、当時の顕密僧たちの神道研究の学問活動と絡んで、『走湯山縁起』の価値を異なる見地から照射している。そうした視点からすれば、『走湯山縁起』の資料的価値を異なる位置付けからとらえ直すことができ、『走湯山縁起』の内容をも読み直すことができると考えている。それは、走湯権現の儀礼世界や、『曽我物語』や『神道集』「三所権現事」、『箱根権現縁起絵巻』などの唱導文芸の問題と、密接に関わる問題でもある。

そこで、本稿では『走湯山縁起』の資料的価値を再検討する試みの初めとして、『走湯山秘決』を含めた『走湯山縁起』の伝来や編纂、その構造等を見直し、その上での若干の考察を施したいと思う。およそ『走湯山縁起』の成立や伝来、また撰者等の問題については、「群書解題」所収の西田長男氏[7]の解題が今日まで踏襲されている。氏の解題を起点に、それ以降の新出資料の存在を考え合わせて、検討して行きたい（以下、必要に応じ『走湯山縁起』『走湯山秘決』を『縁起』『秘決』と表記する）。

2 『走湯山縁起』の伝来、編纂とその構造について

①諸本について

現存する『走湯山縁起』並びに『走湯山秘決』の諸本は、管見によれば、版本である群書類従所収本をはじめとして、写本が前田尊経閣文庫、内閣文庫、大谷大学、神宮文庫、伊豆山神社に所蔵されている。それらの諸本は、以下のように中世の写本【A系統】と江戸時代以降の写本【B系統】とに大別することができる。

【A系統】

㋑前田尊経閣蔵本（写本）（＊含『走湯山上下諸堂目安』）　七巻

【B系統】

㋺群書類従本（版本）（＊『走湯山縁起』のみ）　一冊
㋩内閣文庫蔵甲本（写本）（旧和学講談所、浅草文庫等蔵）　一冊
㋥内閣文庫蔵乙本（写本）（「編修地誌備用典籍」の朱印あり）　一冊
㋭大谷大学蔵本（写本）　一冊
㋬神宮文庫蔵本（写本）　一冊
㋣伊豆山神社蔵甲本（写本）（前田黙蛙書写）　一冊
㋠伊豆山神社蔵乙本（写本）（＊『走湯山秘決』のみ）　二巻

このうち、留意すべきは【A系統】㋑前田尊経閣文庫蔵（全海書写）本である。『縁起』巻三の末尾には、【B系統】の『縁起』諸本にはない走湯山の顕密両派の権勢を示す、短いが重要な件が記されている。西田氏が「これあってこそ前後の意味も無理なく通ずるというべきである」[8]と言われるように、その内容からも、本来の巻三の完全な形が尊経閣蔵本の形態に残っていると考えられる。

これに対し、【B系統】に属する㋺群書類従本、㋩内閣文庫蔵甲本、㋥内閣文庫蔵乙本、㋬神宮文庫蔵本、㋣伊豆山神社蔵甲本など、江戸時代中期以降の写本は、すべて一様に巻三の末尾に脱文が生じたまま書写、継承されているものである。その系譜について、西田氏は「群書解題」[9]の中で、『伊豆山略縁起』（文化十一〈一八一四〉年ごろ、別当般若院権

大僧都法印周道が出版した）の奥書にある「古縁起六軸」が、【B系統】（㋣伊豆山神社甲本・㋚伊豆山神社乙本を除く）の伝本の祖本であろうと指摘されている。諸本校訂の結果[10]からこれらを正しく系統付けることは難しく、今は西田氏の説に準じておきたい。㋣伊豆山神社蔵甲本は、大正年間に前田黙蛙が書写したものである。その註によれば、寛永の頃の再三の写しであり、大田能賢（元伊豆山神主）が故あって縁所に譲ったものを書写したものであるという。『伊豆山略縁起』の巻末には、寛永年中に尾張大納言義直の新写本が納められたという記事があり、「寛永の頃再三の写し」とは、その新写本を祖とする系統の末流である可能性がある。そこで、『走湯山縁起』の諸本としては多少性格が異なる[11]故に躊躇される写本ではあるが、今後の諸本検討のためにもここに取りあげておく。

さて、書写年代、また『縁起』巻三末文の有無により、【A系統】、【B系統】の系譜に大別することができ、そこに時代性をも見出すことができたのであるが、『走湯山縁起』の諸本系統は『秘決』を含めて考察すべきであり、『縁起』の系統の相違は『走湯山秘決』においても同様の趣が見いだせた。『縁起』に比べて『秘決』は語彙の異同が顕著である。比較すると、㋑前田尊経閣蔵本の『秘決』と江戸期の写本の一群とは、語彙、脱文等の表記において一線を画しており、その形態が二分できる。江戸期の諸写本は一様に文字表記や送りがな等が多く一致する。また、㋚伊豆山神社蔵乙本は、別に「走湯山古文書」[12]と題されているものである。やはり江戸時代の諸写本の一群に属し、さらに明治に至る迄の数代に渡っての氏人、神主らの相承と加筆の跡が見られる。現存する江戸時代の写本の中でもっとも新しく、脱文や表記の乱れが甚だしいが、実際に伊豆山神社で繰り返し書写相承がなされてきた書として貴重であるといえよう。

②伝世の形態について

これら諸本の伝来の形態を見てみると、㋑前田尊経閣蔵本が、『走湯山縁起』五巻と『走湯山秘決』一巻、『走湯山上下諸堂目安』一巻の、合計七巻である他は、㋺群書類従本、㋚伊豆山神社乙本を除くすべてが、『走湯山縁起』に『走湯山秘決』を付した六巻で一冊という体裁となっている。『伊豆山略縁起』の巻末には、「古縁起巻六」として『走湯山秘決』が位置づけられており、内閣文庫蔵の『走湯山什物』（江戸時代中期書写）と題する一書の中にも、「走湯山縁起　六巻」とあり、江戸時代には『縁起』と『秘決』が一具で相伝されるものであったことが知られる。[13]

このうち、㋑前田尊経閣蔵本の七巻の、相伝資料としての形態は、注目に値する。いずれも紙高約二五糎で継紙の体裁をしている。[14]『秘決』のみ軸が付されているが、これを書写した全海が、明らかに『秘決』と『走湯山上下諸堂目安』を含む全七巻をもって一具としていたことがわかる。『走湯山上下諸堂目安』には、建久八（一一九七）年から安貞二（一二二八）年までの、走湯山における主な諸堂の建築、法会、強力な庇護者である将軍や北条氏の忌日が明記されている。したがって、全海が書写した全七巻という体裁は、安貞二（一二二八）年以後のものということになる。『走湯山上下諸堂目安』は、『伊豆山略縁起』等にすでにその記述がないばかりか、前田尊経閣文庫以外には現存していない。この書の存在について西田氏[15]もはやくに所在不明となったと推測されるに止まっている。中世において、常に『縁起』と『秘決』と『走湯山上下諸堂目安』が一組で相承されるものであったかはさらに検討を要するが、『走湯山縁起』と『走湯山秘決』は一具で相承されるものであったらしい。前田尊経閣蔵本（旧金沢文庫蔵本）は、最も原本に近い善本と認め

られ、『秘決』を伴うその形態に、中世の『走湯山縁起』の書写相承の姿を垣間見ることができるのである。

③『走湯山縁起』の成立について

では、この『走湯山縁起』並びに『走湯山秘決』の成立は、いかなるものであったか。その詳しい成立年代については、未だにわかっていない。『走湯山縁起』は、巻ごとにそれぞれ異なる奥書を有しており、前田尊経閣蔵本によって各巻の記を挙げれば、次のようである。

巻一　大江政文記

巻二　于時弘仁三年(八一二)壬辰二月十八日／大学寮兼遠江伊豆刺史大江朝臣政文記之

巻三　于時延喜(九〇四)甲子年九月十八日／大教王護国院定額僧阿闍梨／豪忠記／上綱良宣在判／延闍梨在判／保全

巻四　于時天慶二年五月　日／前進士準人学匠伊豆守菅原氏胤記

巻五　已上延暦之記／承平八年(九三八)戊戌四月　日　延暦記之

永延二年(九八八)戊子三月日　沙門延尋記／沙門延尋記／延尋記

奥書には、右のように極めて古い年紀や二大学者の家である菅原、大江氏の名がみられる。西田氏が「延暦や延尋についてはともあれ、大江政文・菅原氏胤・豪忠などは、その実在すら疑われるのであって、菅江二氏の人々や東寺の定額僧をもって本書を権威づけしようとしたものと見られる」[16]と指摘されるように、これらは後世の仮託と見なされる。さらに西田氏は「そう新しい偽撰というわけでもなく、二―三の特徴から、平安時代末期ごろの述作かとも推定せられるのである」とも解説されている。『縁起』の編纂について澤井氏は、「以上の五巻は、『縁起』と総称されてはいるものの、それぞれ独自の奥書を有し、さらに性格も異なることから、一律に成立したものでないことは明らかである」[17]とされており、五巻の複雑な構成は『縁起』の成立問題を考える上で、整理、検討を加えておく必要があろう。そこで、以下に『走湯山縁起』各巻の概略を記し、その主題の配列から考えてみたい。

【巻一】応神天皇二年、相模国唐濱磯部の海漕（神奈川県大磯）に、日輪のごとき光明と音曲を放つ円鏡が出現した。一仙童が、社殿を建てて円鏡を祀ったところ、円鏡は、自らを「異域の神人」「沙訶沙羅」という湯神であると名のり、さらに日金山に飛来し、仙童らの前で俗体の姿を現した。仙童は開山祖師、勧請上人といわれる松葉仙人であり、日金の巌穴にて入定した。

【巻二】松葉仙人の入定に続き、木生仙人（蘭脱、神司行人）、金地上人らが権現を奉斎し、遍路抖擻を行う。聖徳太子は権現に「東明山広大円満大菩薩」という菩薩号と、「走湯権現」という神号を送られた。金地上人の入定後、役行者が湯の中に千手観音像を感得する。元明天皇、称徳天皇の御世に、権現は戸隠、高麗国への逃亡を計ったが、地主白道明神、来宮明神の秘計によって、伊豆の地に還御した。

【巻三】嵯峨天皇の御世、弘法大師空海が伊豆山を来訪する。その後賢安が夢中に走湯権現を感得し、堂社を構え、俗体、千手観音像を祀った。文徳天皇の御世に安然和尚が来訪、その弟子隆保が法華八講を始めた。伊豆山には山門から龍観らが、東寺からは定額僧豪忠や延暦らが来住した。このように、当山は顕密の相争う、尊い山なのである。

【巻四】雷電金剛童子は、南山熊野童子であり、走湯権現の儲けの君である。龍観は、雷電権現の神勅に預かり、上下に勧進し、勧請を行った。権現の姿は、六臂具足の如意輪観音であった。

【巻五】『走湯山縁起』巻五は、他の四巻と異なり、「深秘の巻」として、口伝の類聚のような形態をとる。そこには前半に、伊豆山の密教的な解釈が述べられ、後半には氏人の祖、日精月精と巫女初木の伝説が綴

られた後、氏人延斅らによる諸堂社の沿革が記される。

以上のように、『走湯山縁起』五巻の配列を見てみると、巻一から巻三までに、走湯権現の大磯への来臨と伊豆山への垂迹の経緯、修験の山としての発展から仏教興隆の山への変遷の歴史がまとめられている。つまり、巻一は「異域の神人」である伊豆山権現の大磯への来臨と日金山への垂迹が記され、巻二には日金山における権現の奉斎と修験道の山としての興隆、巻三に顕密仏教の弘法の地としての権現の本地垂迹の縁起語りが記されるという具合である。そして、続く巻四では雷電権現の本地垂迹の縁起と儀軌がまとめられている。雷電権現は熊野修験との関わりが深く、走湯権現と同等の信仰勢力を集めた独特の神性をもっている。巻五は、巻一から巻四を受けて、仏神一体の走湯権現の深秘の謂れを説き明かすもので、氏人延斅らによる走湯山の沿革や氏人の始祖伝承なども記されている。このように、『縁起』の内容と主題を追って考えるならば、『縁起』はあらかじめ五巻を意図して編纂されたものであったと解釈できる。

また、『縁起』は、巻一から巻三までの走湯権現の本地垂迹の縁起と、巻四の雷電権現の本地垂迹の縁起を、編年体の形式を以て叙述している。そのうち巻一と巻二の縁起語りの構造に注目してみると、巻一には、権現の「異域の神人」としての伊豆山への垂迹の縁起語りが、三国伝来の善光寺如来と神功皇后三韓征伐の説話を用いて語られている。続く巻二では、本地垂迹神である権現の奉斎が、有名な『日本書紀』の吉野放光佛の話や聖徳太子の話などの仏法公伝の縁起を用いて語られる構造になっている。この縁起語りの構造を図示してみると、次の如くである。

【図一】

権現の奉斎者	挿話	意味	伊豆山の歴史
巻一			
松葉仙人（開山・勧請仙人）	善光寺如来伝承	仏教公伝以前の仏教伝来の伝承として	権現来臨と鎮座
巻二			
木生仙人（神司仙人）	日本書紀吉野放光像	仏教伝来を示す	修験・仏教の山へ
金地上人	聖徳太子の話	仏法興隆	肉眼で本地仏感得

右のように、巻一・二をとってみても、その配列や縁起語りの手法などから『走湯山縁起』は、はじめから全五巻の体裁をもって編集されていた可能性が指摘できる。伊豆山の歴史は、古く奈良時代にまで遡ることができ、『縁起』の中には平安末期にまで遡る記事が混在している。これは、歴史書の編纂という一大事業にあたって、天台、真言という宗派を越えたあらゆる走湯山にまつわる霊験譚や記録類が収集され、それがある時期において整理や再構成が加えられて、『走湯山縁起』五巻に大成されたものであるからと考えられるのである。

また、『走湯山秘決』は、『走湯山縁起』を基調に成立するものであり、『縁起』と一具になって初めて機能するものである。したがって、『秘決』は『縁起』の編纂を受けてほぼ同時期に成立していたと考えられる。

④編纂者とその成立年について

では、その編纂は誰によって、いつごろなされたものであったか。

作者、編者について、詳しくは不明である。但し『縁起』巻三には、撰者・作者として東寺僧豪忠、延敷らの名が署され、『縁起』巻五には、真済、延敷らに仮託された口伝が記されていることから、西田氏は真言密教系の僧侶の手になると指摘する。鎌倉時代の初めに、覚淵のもとで別当寺密厳院が開かれていることなどを考え合わせると、氏の指摘の通り、真言密教系の僧侶たちの手になるか、もしくはその思想を強く受けた縁起作成のプロの手により成立したものと考えられよう。

また、『縁起』編纂の気運は、鎌倉幕府の設立と二所権現信仰の隆盛のもとで高まったと想像される。『走湯山縁起』成立の時期に関して、西田氏[18]は平安時代末期にまで遡り得るとされ、その最下限を『走湯山縁起』を書写した全海の没した貞和二（一三四六）年とされている。『走湯山縁起』の成立が平安末期にまで遡り得るかは、疑問が残るところであるが、伊豆、箱根の二所の縁起物類の形成をみると、『箱根権現縁起絵巻』が、永仁年間（一二九三～一二九九）頃に成立[19]している。この『絵巻』は、『箱根山縁起并序』と『走湯山縁起』を基調に成り立っているから、したがって『絵巻』に先行して伊豆、箱根の縁起が成立していたことは確かである。『箱根山縁起并序』は、その奥書によれば、建久二（一一九一）年に大夫房覚明が執筆したものと伝えている。『箱根山縁起并序』と『走湯山縁起』は、ともに良く似た本地垂迹の縁起語りの型をもっており、伊豆、箱根の両所権現の縁起は、神仏習合思想に基づき、ほぼ同じような時期に作られたものと考えられる。また、西田氏が指摘された『走湯山縁起』成立の最下限については、平成八年に金沢文庫で展観された剱阿手択本『走湯権現當峯遍路本縁起集』[20]の存在により、やや遡らせることができる。剱阿手択の右の書は、『走湯山縁起』を基調に伊豆山の僧・修験者たちが注釈を付し、新たな縁起として綴ったものである。とすれば、『走湯権現當峯遍路本縁起集』より以前に『走湯山縁起』が成立していたはずである。津田徹英氏の解説によれば、剱阿手択の右の書は、剱阿が室生寺における神祇灌頂を受けた際（正和元〈一三一二〉年から文保二〈一三一八〉年頃か）に師秀範から相承したもの[21]か、遅くとも建武三〈一三三六〉年以前に伝領したものである。それに『走湯権現當峯遍路本縁起集』には、『箱根山縁起并序』からの抄出とみられる記事も有り、したがって未だ決定的な証左は見いだせないものの、『走湯山縁起』は一三〇〇年代初めにはすでに成立し、書写されるに至っていたと考え得るのである。『走湯山縁起』ならびに『秘決』の編纂時期が鎌倉時代であることは、間違いないであろう。

3 『走湯山縁起』と『走湯山秘決』の関係について

『走湯山縁起』全五巻が、ほぼ一時期に大成されたと考えられること、また『走湯山縁起』と『走湯山秘決』が一具として扱われるべきものであることを縷々述べたのであるが、『走湯山縁起』と『走湯山秘決』の具体的な関係から、『秘決』を含む『走湯山縁起』の価値について、二、三触れておきたい。

①『走湯山縁起』から『走湯山秘決』へ

前述の通り、『縁起』は、巻一から巻三までに権現の本地垂迹の縁起を記し、巻四に雷電権現の垂迹の縁起を記してのち、巻五において真済や氏人の口伝として様々な儀軌や縁起が記され、仏神一体の権現の深秘の謂れが説き明かされていた。これを受けて生成する『秘決』との関係の中からは、両部神道思想を基幹として、走湯山の神々の本地垂迹を語る縁起から走湯権現の神代の物語としての新たな縁起語りの生成という、興味深い問題点を見いだすことができる。まず『縁起』巻五から走湯山における両部神道説の形成の様子を見てみたい。以下は、『縁起』巻五

に記された真済口伝とされるものの一つである。

海底大日印文、五ケ口傳、中心は伊勢大神、内胎蔵は大日、外金剛界は大日、已上中臺、南方は高野丹生、大明神寶珠、西方は熊野蓮花、北方は羽黒羯磨、東方は走湯権現圓鏡なり。日本は是れ大日如来、密厳花藏の浄刹なり。四佛四方に安ず。天照大神の中心たる所、此の海底の印文は、皆各大龍の背に在るなり。(22)

これは、中世に広く流布した大日の印文説を引いて、内宮を胎蔵界、外宮を金剛界とする伊勢天照大神を中心とした金剛界五智曼荼羅を開示し、伊豆山を東方大円鏡智部に配当するものである。『縁起』は日本の神祇体系を、大日如来を根源とする神道曼荼羅として描き出し、走湯権現の金胎不二の曼荼羅的世界を開示しているのである。『縁起』はまたその一方で、走湯権現が地底に交和して臥す赤白の二竜であるとしている。そして権現の地下浄土は、八穴道を介して地方の霊山聖地と通じているとし、胎蔵界八葉曼荼羅の存在を暗示させる。『縁起』は、温泉を司る権現は火と水の和合の姿であり、また赤白の和合した不二の姿である等と説きながら、さらに仏神一体の神祇世界を、金剛界、胎蔵界の不二の姿としてとらえてゆくのである。このように、火と水の徳を説き、金胎不二の世界を語る思想は、両部神道の特色である。『縁起』巻五には、走湯山に伝播した両部神道思想が走湯山の神仏に対して及ぼした解釈、注釈活動の結果としての神祇世界が、密教の側から口伝という権威を藉りて表出しているといえる。またさらに『縁起』巻五は氏人の口伝として、氏人の始祖伝承や氏人が奉斎する走湯権現、女体権現を中心とする権現の儀軌や地下浄土の世界を描き、走湯山の沿革をも記している。そしてそれが、『秘決』の物語世界の基本構成となるのだが、そうした仏神一体の権現世界の構図が、『走湯山秘決』の物語の終わりに極めて簡潔に記されている。たとえばそれは、以下のようである。

一走湯権現ハ、伊弉諾、伊弉冉尊皇子、一女三男之随一也。
正哉吾勝々速日天忍穂耳命（本地十手観音）、是レ也。
月光童子者、正哉吾勝皇子、天津彦々火瓊々杵尊乃弟也。御母、孝幡千々姫也。
一月光童子、雷光童子也。（本地如意輪観音今号雷電）八大童子ヲ以テ眷属トナス。（本地八大観音也）
一孝幡者、女躰、遍照権現是レ也。本地阿弥陀如来。(23)（以下略）

この短い箇条に表わされているように、『縁起』巻五が仏神一体の権現宇宙を構築していた一方で、走湯山では仏教と切り離せない神道としての部分において、純粋に日本紀に連なる走湯権現の、神の姿が奉斎され、俗体権現が正哉吾勝勝速日天忍穂耳命、女体権現が孝幡千々姫尊として崇められていた。走湯山の本地垂迹神としての権現の世界と、日本紀の世界に連なる神祇体系とを説き明かすためには、具体的な神話が必要である。そこで『縁起』五巻を基調として、走湯山の神代の物語として語られたのが、『走湯山秘決』ではなかったか。『走湯山秘決』では『縁起』と異なり、俗体権現は正哉吾勝勝速日天忍穂耳命として、女体権現が孝幡千々姫として、雷電権現は月光童子として登場する。権現を奉斎し守護する氏人、巫女らも重要な登場人物であり、『秘決』は氏人や巫女、月光童子の活動を通して、走湯山の神々の世界を描き出している。彼等は現実においては、託宣や唱導、芸能などの活動を通して権現の世界を具現するものたちであり、神話の中においては走湯権現の神代の世界に直接入り込める存在であった。そして物語は最後に、前述のように短い箇条でもって『秘決』に登場する神々と現実の権現社の祭祀との関係を整理し、その本地を明かすのだ。それに続いて描かれた四至図は、走湯権現の神域を表わすとともに、氏人や月光童子、巫女初木といった走湯権現に奉仕するものたちが護る結界を示している。四至図は物語の舞台でありかつ権現の聖地なのである。

ここに、『秘決』のあらましを見てみよう。

人王五代孝照天皇の御世、初島をつくった巫女初木は、初島と久地良山（日金山）とを往来していた。ある日、初木は月光童子と対面する。月光童子は自分が走湯権現の儲けの子であり、熊野王子であること、また父の正哉吾勝勝速日天忍穂耳命についてを語り、初木に杉のヤニの中から生まれてくる日精、月精を育てるように告げる。

初木は日精、月精を育てた。彼等は半月を久地良山の地底の権現の世界で過ごしていた。あるとき、月光童子、初木、日精、月精は、久地良山の穴から権現の浄土を見て廻り、地上へ戻る。

應神天皇の御宇、唐濱に鏡が出現し、久地良山に飛来した。日精、月精、松原の聖はこれを奉斎したという。

このように、『秘決』の物語は、前半に月光童子、巫女初木という権現の奉斎者たちの問答によって権現の本誓が語られ、常に火と水の和合の功徳が記される。後半には氏人を含めた奉斎者たちの浄土廻りによって、権現の地下世界が明かされる。物語自体は非常に簡単なものであるが、この物語には、すでに指摘した以外にも、『縁起』巻五を基調として様々な縁起語りの趣向が込められているのである。例えば正哉吾勝勝速日天忍穂耳命が一女三男のうちの月神にあたるとする設定には、『日本書紀』にはない、走湯山独自の日本紀の世界が構築されている。そして、日神天照大神に対し、月神に正哉吾勝勝速日天忍穂耳命を配し、走湯権現である正哉吾勝勝速日天忍穂耳命が天照大神の魂をくわえて水と火を司るとして、天忍穂耳命と天照大神との同体説を打ち出し、金胎不二の権現の姿を説き明かす。さらに、浄土廻りという手法で、仏神一体の様々な権現の姿―俗体神と女体神、生身の千手観音である赤白の二竜の姿―を視覚的に描き出し、最後に日金山に月の鏡が垂迹するという本地垂迹の縁起を導く。このようにして、『秘決』は『縁起』全五巻における本地垂迹説を基調とする新たな神話を成立させているのである。月光童子の語りや浄土廻りにおける権現の造型等は、本体を観音とする仏神一体の権現に対する中世日本紀的な神道説の注釈活動に結びつくものであり、その釋義が『秘決』全体を支えていたことが知られる。『縁起』と同様に『秘決』もまた、火と水の和合という金胎不二の両部神道思想を常にその基調としていたのであり、『縁起』を基調とした伊豆山における「中世日本紀」なる世界を構築するものが『秘決』であるといえる。このことからも、『縁起』と『秘決』は一組で機能する関係であることが指摘できよう。

②中世日本紀の資料としての『走湯山縁起』と『走湯山秘決』

以上のように、『走湯山縁起』と『走湯山秘決』の問題点として、両部神道説の受容に基づく縁起語りのあり方を少しく指摘したのであるが、ここにこそ全海がこれを書写した目的の一端が垣間見られる所である。全海が『走湯山縁起』を書写したのは、嘉暦元（一三二六）年から暦応五（一三四二）年にかけての、称名寺在住の時と思われる。全海の師は、称名寺第二代長老であって、劔阿は両部神道に造形が深く、二所参詣御代官を勤めた長井貞秀との交友を通じて、神典の書写、収集活動を行っている。[24]『走湯権現當峯遍路本縁起集』は、劔阿が室生寺における神祇灌頂の際の相承資料として伝領したものである。その付法を受け継ぐ全海は、さらに盛んに神道関係の資料や諸山霊場の縁起類の書写活動を行っており、『走湯山縁起』も膨大な書写活動の一環として書写、収集されたものである。このように、『走湯山縁起』の書写活動の背景には密教僧たちの盛んな神道研究があったのであり、『走湯山縁起』の生成に関しても、その影響は大きかったと考えられる。そして、本地垂迹の縁

起語りに基づく『走湯山縁起』と『走湯山秘決』の関係からは、縁起から本地物文芸への生成の手がかりが見いだせるのであり、それは『神道集』所収「二所権現事」や『箱根権現縁起絵巻』における本地物文芸と、その根底で繋がる事象である。またさらに『縁起』と『秘決』の関係は、熱田神宮の縁起である『熱田宮秘釋見聞』と『熱田の深秘』[25]の関係と酷似しており、両者がその基盤を一にしているような点も看過できないことである。ここに、従来見落とされてきた『走湯山縁起』の新たな価値を見いだすことができよう。『秘決』はまた、『富士の人穴』のような浄土廻りの趣向をも取り込んでおり、このことは富士、箱根、伊豆、江ノ島という文化圏の中に生成する修験道文芸として、また熊野修験との関係を考える上でも注目すべきものである。

澤井氏[26]は、『走湯山秘決』について種々の考察をされているが、とくに巫女初木という巫女集団に対する考察は、伊豆山全体の芸能活動の問題を含めて重要な示唆を含んでおり、今後合わせて研究を進めて行きたいと思っている。

4 おわりに

以上、『走湯山縁起』が『走湯山秘決』を伴って機能する縁起書であること、そして縁起語りの中に伊豆山の両部神道説の展開と中世日本紀の世界に結びつく本地物文芸の生成基盤が見いだせること、また縁起語りの問題が伊豆山のみならず、熊野、善光寺、熱田、江ノ島などの聖地の文芸とも結びつくものであり、中世文学を考える上でも極めて貴重な資料であること等々を指摘したのである。また、全海や覚阿が書写した走湯山の縁起書の相伝の場と神祇灌頂という伝授の場とが近いことも注目に値しよう。今日、伊豆山において両部神道の発達を示す資料はほとんどなく、『走湯山縁起』にその一端が窺われることは貴重である。様々な問題が彷彿とするが、それらはまた改めて考究の機を得たいと思う。

注

(1)源延と叡山浄土教については、三田全信氏「伊豆山源延とその浄土教」（『仏教大学研究紀要』第五四号、昭四五・三）に詳しい。源延は、建保元（一二一三）年の走湯山常行堂の上棟の際や、貞応三（一二二四）年の北条義時の墳墓の供養において導師を勤めるなど、その活躍が『吾妻鏡』や『北条九代記』等にも記されている。

(2)安居院聖覚は、建仁元（一二〇一）年に青蓮院慈円から伊豆山、箱根山の支配権を譲られ、来山する。聖覚の伊豆、箱根への来山については、角川源義氏『語り物文芸の発生』（昭五十・十、東京堂出版）に詳しい。

(3)関東における真言密教の伝播については、櫛田良洪氏『真言密教成立過程の研究』（昭三九・八、山喜房仏書林）に詳しい。

(4)澤井英樹氏「異域の神人と神龍―走湯山縁起の世界(一)」（「神語り研究」三、平一・十一）。

(5)澤井英樹氏「行者・巫女・氏人―走湯山縁起の世界(二)」（「神語り研究」四、平六・七）。

(6)全海の神道書や縁起類の盛んな書写活動は、天台系の神道書にまで及んでいる。その活動については、神奈川県金沢文庫『金沢文庫の中世神道資料』（平八・八）所載、津田徹英氏の解説に詳しい。

(7)西田長男氏「走湯山縁起の作者と成立年代について」（『ぐんしょ』一の七）、同氏『群書解題　神祇部』「走湯山縁起」の項（昭五七・三）。

(8)西田長男氏『群書解題　神祇部』「走湯山縁起」の項（昭五七・三、一〇六頁）。この【B系統】に見られない『縁起』巻三の文については、西田長男氏『群書解題　神祇部』所収「走湯山縁起」や貫達人

氏「伊豆山神社の歴史」(三浦古文化研究所『三浦古文化　伊豆山神社特集』、昭五六)に翻刻、紹介がある。

⑼西田長男氏『群書解題　神祇部』「走湯山縁起」の項(昭五七・三、一〇七～一〇八頁)。

⑽㋑尊経閣文庫本を底本として校異を取った結果、㋩内閣文庫蔵(旧和学講談所、浅草文庫等蔵)甲本は、㋺群書類従本と本文のほとんどが一致している。巻三の末尾がないために、尊経閣文庫本と同じ系統とは認められない。しかし、部分的に脱文があるものの、尊経閣文庫本に比較的近い文字表記がなされている。群書類従本にはまた、奥書に「屋代弘賢本」を以て校合したことが示されているが、この「屋代弘賢本」や『伊豆山略縁起』が記す「古縁起六軸」の所在については未詳である。また、㋭大谷大学蔵本については、未だ閲覧の機を得ていないが、群書類従本系に属すると想像される。

⑾㋟伊豆山神社蔵甲本は、明治の廃仏毀釈の混乱以後に、黙蛙氏の御尽力によって書写されて伝わったものである。由緒書を残すことを優先としたためか、忠実な書写ではないような感がある。特徴としては訓仮名が多く、漢文が訓読された部分も見られる。その意味で他の写本とは性格が異なるものと考える。

⑿「走湯山古文書」上下二巻は、神道大系編纂会『神道大系　神社編二一　三島・箱根・伊豆』(平二・十二)に翻刻、紹介されている。

⒀『秘決』は氏人上首のみの相承と記されている。『神道体系』所収の「伊豆国加茂郡伊豆山神社書上」には、伊豆別命(日精、月精)の後裔である氏人延敷教(延)が初代別当であったと記されている。また『熱海市史』には、江戸時代中期ごろに、般若院(当時の走湯山別当寺)が、『秘決』を別当交代の時のみ披見できるものと語った経緯が記されている(澤井英樹氏「行者・巫女・氏人―走湯山縁起の世界㈠」〈「神語り研究」四、平六・七、八五頁〉参照)。これらのことから、別当による『縁起』相承の時に『秘決』も相承されたことが明らかとなる。それは中世以来の相承のあり方であったと推測される。

⒁全海書写本には、端裏書に、各「走湯山縁起一(二、三、四、五)帳箱五箱之内　全海」と記されている。

⒂西田長男氏『群書解題　神祇部』「走湯山縁起」の項(昭五七・三、一〇七頁)。

⒃西田長男氏『群書解題　神祇部』「走湯山縁起」の項(昭五七・三、一〇二頁)。

⒄澤井英樹氏「行者・巫女・氏人―走湯山縁起の世界㈠」(「神語り研究」四、平六・七、五九頁)。

⒅西田長男氏『群書解題　神祇部』「走湯山縁起」の項(昭五七・三、一〇二頁)。

⒆『箱根権現縁起絵巻』の成立には諸説ある。例えば絵巻の箱根社壇の図像から、竹内尚次氏は永仁年間以後、五来重氏は永仁年間以前と指摘されている。竹内尚次氏「『箱根権現縁起絵巻』への一考」(『箱根町史』第一巻、昭四二・三、角川書店)、五来氏「箱根山修験の二種の縁起について―『筥根山縁起并序』と『筥根権現縁起絵巻』―」(『山岳宗教史研究叢書十四　修験道の美術・文学Ⅰ』、昭五五・六、名著出版)。

⒇『走湯権現當峯遍路本縁起集』は、神奈川県金沢文庫『金沢文庫の中世神道資料』(平八・八)に収録されている。

㉑劔阿の神道書の書写、相承については、神奈川県金沢文庫『金沢文庫の中世神道資料』(平八・八)所収の津田徹英氏の解説に詳しい。また、劔阿が室生寺で伝授した園城寺系の不動明王の血脈印信が

『忍空授剱阿状』に見え、そこには源延の名も見られる。

(22)本文は前田尊経閣文庫蔵本をもとに、私に訓読、句読点を施した。

(23)本文は前田尊経閣文庫蔵本をもとに、私に句読点等を施した。

(24)櫛田良洪氏『真言密教成立過程の研究』（昭三九・八、山喜房仏書林、第六章）参照。

(25)『熱田宮秘釋見聞』『熱田の深秘』については、伊藤正義氏「熱田の深秘―中世日本紀注―」（『人文研究』三一、昭五五・三）、同氏「続熱田の深秘―資料『神祇官』―」（『人文研究』三四、昭五九）に詳しい。熱田神宮の縁起物類と、『走湯山縁起』等との関係は、平成八年度修士論文にて発表した。改めて別稿で紹介したい。

(26)澤井氏は前掲論文において、『秘決』がもともと初島の巫女集団と「原氏人集団」の持ち伝える秘伝であり、それが『縁起』に摂取されたという立場で、『秘決』を読み解かれている。月光童子の父＝月神がオシホミミ（日神の子）と同体であるという接合には、「月の思想」が表出され、それは初島の巫女集団の月の重要視と神格化、月に対する海洋信仰が底辺にある、といった考察は注目に値する。つまり澤井氏は、『秘決』の生成に奥深い問題を見据えられているのである。氏の学恩に依りつつ、物語の本質が水と火の和合を金胎不二の曼荼羅的思想と解する両部神道を基幹としていること等々と併せてさらに検討を加えてゆけば、『秘決』と『縁起』の有する複雑な機能や意義が新たに見出せるものと考えている。

付記　このたび、伊豆山神社の宮司であられる原田尚文様、般若院御住職岡本興尚様、金沢文庫学芸員津田徹英様、伊豆山郷土資料館元館長太田君男様、前田尊経閣文庫等の皆様から貴重な資料を閲覧させて戴き、様々な御教示を賜りました。篤く御礼申し上げます。